《敦煌寫本研究年報》第十七號（2023.03）217–225 頁

PT1249藏文音寫四分律抄斷片*

PT1249, a Fragment of an Excerpt from the *Dharmaguptaka-vinaya* Written in Tibetan Script

高田時雄

はじめに

敦煌藏經洞から發見された大量の古寫本の中に、チベット文字で書き記された漢文文獻の存在が報告されたのは今から凡そ百年前の一九二〇年代後半であった。それは金剛般若經[1]と阿彌陀經[2]というよくある佛典で、音寫形式から云えば、長安方言を基礎とする比較的古い層に屬するものだが、それでも吐蕃期が終わった張氏歸義軍期に書かれたものと思われる。もちろん當時はそういった時代判定は不可能であった。その後、サイモン氏（Walter Simon）によって、英國所藏寫本のみならず新たにフランス國立圖書館所藏のペリオ將來寫本の中からこの種の文獻の多くが發掘され、漢字テキストが同定された[3]。とりわけ英國に所藏されるいわゆる「長卷」（Long Scroll）の大まかな內容を紹介したことは、サイモン氏の大きな貢獻であった[4]。その後「長卷」は筆者によってほぼ全面的に漢字還元が行われたが[5]、これは敦煌一帶に行われた河西方言によって音寫されていた。歸義軍期、しかも十世紀の曹氏歸義軍期においてもチベット文字で漢語を書き記すことがあっ

*小文の內容は、2019 年 6 月 16 日、復旦大學歷史學系主催の「絲綢之路寫本文化與多元文明」國際學術研討會において發表した。また小文は日本學術振興會科學研究費（20K00379）による成果の一部である。

[1]F.W.Thomas & G.L.M.Clauson, A Chinese Buddhist Text in Tibetan Writing, *JRAS*, 1926, No.3, pp.508–526.

[2]F.W.Thomas & G.L.M.Clauson, A Second Chinese Buddhist Text in Tibetan Characters, *JRAS*, 1927, No.2, pp.281–306. Supplementary Note, pp.858–860.

[3]Walter Simon, A Note on Chinese Texts in Tibetan Transcription, *BSOAS*, Vol.21, No.1/3 (1958), pp.334–343.

[4]筆者の『敦煌資料による中國語史の研究——九・十世紀の河西方言』（東京：創文社、1988 年）はそれらの資料を用い、對音の特徵に基づいて敦煌藏文書寫漢文文獻を二種に分類する試みであった。

[5]高田「チベット文字書寫「長卷」の研究（本文編）」、『東方學報・京都』第 65 册（1993 年 3 月）、380–313 頁。

た事實は、敦煌の言語生活を考える上で特筆すべき事實である。漢人によるチベット文字の使用がチベット支配期に胚胎することは間違いないが、確實に吐蕃期に屬する文獻は意外に少ない。小文では、おそらく吐蕃期のものと思われる四分律拔粹の一斷片について紹介したい。

一、PT1249 の斷片

ラルー女史の編になる『フランス國立圖書館所藏チベット文獻目錄』第二分册[6]の末尾近くに、チベット文字で漢語を寫した寫本が集中的に登錄されている。多くは短い寫本斷片で、漢文の同定はなかなか容易ではない。筆者はこれまでも折に觸れて、それらの解讀に努めてきたが、費やした勞力に較べると成果は僅かなものであった[7]。しかるに今、もう一つの斷片を同定し得たので、この場を借りて報告したい。

ラルー目錄によれば、PT1249 は「漢語音譯の斷片。一葉の左片で、最長部 9x16cm、4 行、罫線あり、邊緣は灰色」と記述され[8]、正面の 2 行と背面の第 3 行（最終行）が移錄されている。いま圖版[9]とともに、ローマ字轉寫テキスト[10]に對應する漢字を添えて掲げてみよう。

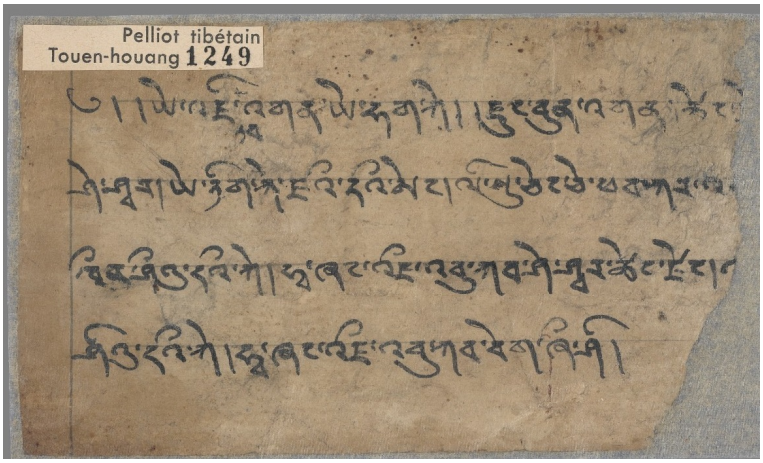

圖 1　PT1249 正面

[6]Marcelle Lalou, *Inventaire des manuscrits tibétains de Touen-houang conservés à la Bibliothèque Nationale*, II, N°s 850–1282, Paris: Bibliothèque Nationale, 1950.

[7]僅かな例として、PT1254 が擧げられる。高田「藏文書寫的漢文《願新郎、願新婦》」、王三慶・鄭阿財合編『2013 敦煌、吐魯番國際學術研討會論文集』、臺南：國立成功大學中國文學系、2014 年 12 月、233–239 頁。

[8]Lalou, *Inventaire*, II, p.92: “Fragments de transcription du chinois. 1 morceau gauche de f. (9x16 au moins); 4 l., règl. et marges grises.”

[9]圖版は Gallica（`https://gallica.bnf.fr/`）による。

[10]轉寫方式は Wylie 方式により、*gi-gu inverse* は近年多用される大文字の “I” を用いた。

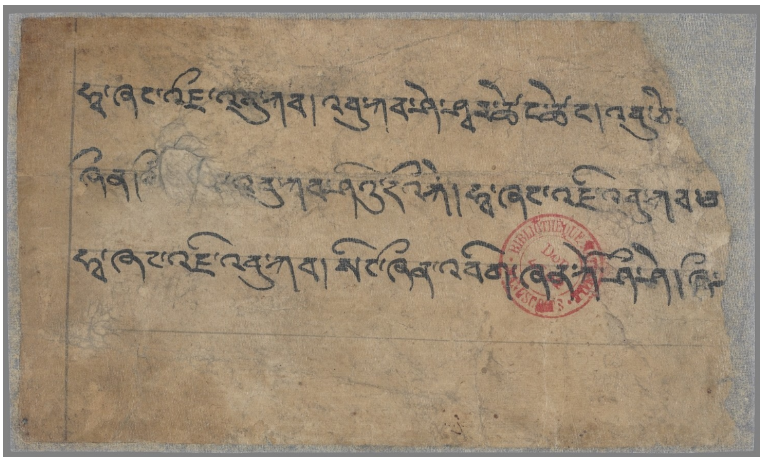

圖 2　PT1249 背面

［正面］

1. ye ’ji tab ’gan ye hag ke / jung bun ’gan tsheng［ ］e ...
   以 尼 答 言 已 學 戒　重 問 願 清 淨
2. she shwar / ye tig ke dza’I da’I seng / li su ceng ce phab kar ’［ ］ ...
   所 說 已 得 戒 在 大 僧 禮 須 正 知 法 羯 磨
3. khIr shI’u da’I ke / hwa zhang ’jI ’bu kab shwar tsheng dzeng / ’［ ］ ...
   乞 受 大 戒 和 尚 尼 某 甲 說 清 淨 無
4. shi’u da’I ke / hwa zhang ’jI ’bu kab beg zhI shi / ...
   受 大 戒 和 尚 尼 某 甲 白 如 是

［背面］

1. hwa zhang ’jI ’bu kab / ’bu kab she shwar tsheng tsheng / ’bu c［ ］ ...
   和 尚 尼 某 甲 某 甲 所 說 清 淨 無 諸
2. zhIn / ［ ］I ［ ］ ’bu kab shi’u da’I ke / hwa zhang ’ji ’bu kab c［ ］ ...
   忍 僧 授 某 甲 受 大 戒 和 尚 尼 某 甲 者
3. hwa zhang ’jI ’bu kab / sing zhIn ’big zhan ko shI she / zhI ...
   和 尚 尼 某 甲 僧 忍 默 然 故 是 事 如

以上のように漢字還元できるわけだが、ではこれが如何なるテキストであるかというと、多くの文字が『四分律』（［後秦］佛陀耶舍譯）の巻四十八「比丘尼揵度第十七」中の文字にほぼ一致する[11]。ただ正面第一、二行については、『四分律』と完全に一致するわけではなく、また幾つかの文字は『四分律』「比丘尼揵度第十七」

[11]『大正藏』第 22 巻、頁 924 下欄。

には見えない。これらは對音によって推定して補い、上掲の對照テキストではこれらの字句をゴチックで示しておいた[12]。ところで『四分律』の文字は、ほとんどそのまま『四分比丘尼羯磨法』[13]にも見えているが、背面一行目の「某甲所說 清淨」をこの書では「某甲自說清淨」に作るという相違があるので[14]、この斷片が『四分律』のテキストに據っていることが確認できる。

若干長文になるが、テキストの文脈を窺うために、『四分律』の當該箇所を下に引いておくことにする。本斷片に見える字句には下線を施した。

> 若式叉摩那學戒已，若年滿二十、若滿十二，應與受大戒。白四羯磨，應如是與戒。將受戒人離聞處著見處，是中戒師應差教授師。『大姊僧聽！ 此某甲從和尚尼某甲求受大戒。若僧時到僧忍聽，某甲爲教授師。白如是。』教授者應至受戒人所語言：『汝此安陀會、欝多羅僧、僧伽梨、此僧竭支覆肩衣、此是鉢，此是汝衣鉢不？ 諦聽！ 今是眞誠時，我今問汝，有便言有，無當言無。汝字何等？ 和尚字誰？ 年滿二十不？ 衣鉢具不？ 父母若夫主爲聽汝不？ 不負人債不？ 非婢不？ 是女人不？ 女人有如是諸病：癩、白癩、癰疽、乾疽、癲狂、二根、二道合、道小、大小便常漏、大小便涕唾常出。汝有如是諸病不？』若答言：『無。』應語言：『如我向者所問，僧中亦當如是問汝。汝亦當作如是答。』彼教授師問已，應還至僧中，如常威儀至舒手及比丘尼處立，應作白：『大姊僧聽！ 此某甲從和尚尼某甲求受大戒。若僧時到僧忍聽，我已教授竟聽使來。白如是。』彼應語言：『來。』來已應爲捉鉢，教禮比丘尼僧足，在戒師前胡跪合掌，白如是言：『大姊僧聽！ 我某甲從和尚尼某甲求受大戒，我某甲今從僧乞受大戒，和尚尼某甲。眾僧拔濟我，慈愍故。』如是第二、第三說。是中戒師應作白：『大姊僧聽！ 此某甲從和尚尼某甲求受大戒，此某甲今從僧乞受大戒，和尚尼某甲。若僧時到僧忍聽，我問諸難事。白如是。』『汝諦聽！ 今是眞誠時、實語時。我今問汝，有當言有，無當言無。汝字何等？ 和尚字誰？ 年滿二十不？ 衣鉢具不？ 父母若夫主聽汝不？ 汝非負人債不？ 汝非婢不？ 汝是女人不？ 女人有如是諸病：癩、白癩、癰疽、乾痟、癲狂、二根、二道合、道小、大小便常漏、大小便涕唾常出。汝有如是諸病不？』答言：『無。』應作白：『大姊僧聽！ 此某甲從和尚尼某甲求受大戒，此某甲今從僧乞受大戒，和尚尼某甲。某甲所說清淨，無諸難事，年滿二十，衣鉢具足。若僧時到僧忍聽，爲某甲受大戒，和尚尼某甲。白如是。』『大姊僧聽！ 此某甲從和尚尼某甲求受大戒，此

[12]正面第一、第二行のうち、ゴチックにしていない字句は、出現位置はともかくとして『四分律』中の前後テキストに見出せるものである。

[13]［劉宋］求那跋摩譯、受戒法第二、『大正藏』第 22 巻、頁 1067 上欄。

[14]道宣『四分律删補隨機羯磨』（『大正藏』第 40 巻、頁 500 上欄）も同じく「某甲自說清淨」に作っているのは、『四分比丘尼羯磨法』を用いたものであろう。

某甲今從眾僧乞受大戒, 和尚尼某甲。某甲所說清淨，無諸難事, 年滿二十、衣鉢具足。僧今授某甲大戒, 和尚尼某甲。誰諸大姊忍僧授某甲大戒、和尚尼某甲者默然，誰不忍者說。是初羯磨竟。』第二、第三亦如是說。『僧已忍與某甲受大戒竟、和尚尼某甲，僧忍，默然故，是事如是持。』

『四分律』のこの箇所は比丘尼の受戒法、細かく言えば式叉摩那が二年の戒を學習し終えたのち具足戒を受ける際の作法を具體的に解說する箇條である。敦煌に於けるその運用については後で觸れることにして、先ず對音の性質とこの斷片の書寫年代について考えて見よう。

二、對音の性質及び書寫年代について

確實に『四分律』のテキストに據っていると思われる表面第三行以下の對音をすべて表にして示した[15]。

表：PT1249 對音表

文字	音韻	對音	出現箇所
和	果合一平戈匣	hwa	R3, R4, V1, V2, V3
故	遇合一去暮見	ko	V3
如	遇合三平魚日	zhI	R4, V4
無	遇合三平虞微	’bu	V1
大	蟹開一去泰定	da’I	R3, R4, V2
戒	蟹開二去怪見	ke	R3, R4, V2
尼	止開三平脂泥	’ji, ’jI	R3, R4, V1, V2, V3
是	止開三上紙禪	shi, shI	R4, V3
事	止開三去志崇	shI	V3
受	流開三上有禪	shI’u	R3, R4, V2
某	流開一上厚明	’bu	R3, R4, V1(2), V2(2), V3
甲	咸開二入狎見	kab	R3, R4, V1(2), V2(2), V3
然	山開三平仙日	zhan	V3
說	山合三入薛書	shwar	R3, V1
忍	臻開三上軫日	zhIn	V2, V3
乞	臻開三入迄溪	khIr	R3
尚	宕開三去漾禪	zhang	R3, R4, V1, V2, V3

[15]各文字につき、中古音の音韻位置を丁聲樹『古今字音對照手册』（北京：中華書局、1981 年 10 月）によって示し、次いで對音のローマ字轉寫、最後に出現箇所を記入した。例えば R3 は正面第三行、V1 は背面第一行である。

僧	曾開一平登心	sing	V3
默	曾開一入德明	’big	V3
白	梗開二入陌竝	beg	R4
清	梗開三平清清	tsheng	R3, V1
淨	梗開三去勁從	dzeng, tsheng	R3, V1

異なり字數にして僅か二十二字であり、對音の性質及び書寫年代を窺うためだけなら必ずしも必須とは思わないが、藏文轉寫漢文資料の對音表[16]を增補する上で或いは多少役に立つかもしれない。

最初に述べておいたように、敦煌の藏文書寫漢文文獻の對音を觀察すると、長安音を基礎とする古層のものと、敦煌一帶に行われた土着の河西方言に基づく新しい層のものの明瞭な區別が存在する[17]。いまこの斷片の對音を見ると、河西方言的な要素はほとんど見られず、長安音が背後にあると結論し得る。もちろん魚韻字「如」を zhi で寫すような河西方言的特徵は見られはするが、これは藏文書寫『阿彌陀經』（O）や『天地八陽神呪經』（TD）でも同じであり、敦煌に行われた長安音が不可避的に蒙った地域的訛音と考えられる。反對に、長安音を基礎とする明確な特徵は、宕攝、梗攝の鼻音韻尾が保存されていることである。例えば、

清　梗攝三等　tsheng (tshe)　R3, V1
淨　梗攝三等　dzeng (dze)　R3; tsheng V1
尙　宕攝三等　zhang (zho)　R3, R4, V1, V2, V3

括弧內に示した對音形は河西方言のそれであり、十世紀の曹氏歸義軍期の文獻には普遍的に現れる。このような鼻音韻尾の脫落は、梗攝、宕攝に限って出現するものであり、同じように軟口蓋鼻音韻尾を有する通攝や曾攝には現れない。したがって背面第三行に「僧」字が見えるが、これは曾攝一等字で、この斷片でも背面第三行に sing で寫されており、鼻音韻尾は保存されている。これは河西方言でも同樣に保存されているので、新古の區別を辨別する基準とはならないのである。ちなみに「淨」字が背面第一行で規範的な dzeng でなく tsheng と寫されているのは、直前の「清」字 tsheng に影響されたものであろう。韻尾については正しく-ng が表記されている。

他の對音例については、新古の區別を判別する上で明瞭な證據にはならないから、ここでは個々の對音については立ち入らないが、全體的に見てこの斷片を古い層のものと見なすことには異論がないと思われる。さらにこの斷片が梵夾裝で

[16]例えば高田『敦煌資料による中國語史の研究——九・十世紀の河西方言』（東京：創文社、1988 年 2 月）「附錄三 資料對音表」。
[17]高田『敦煌資料による中國語史の研究』、頁 37–38 を參照。

あるという外的特徴を勘案すると、これが吐蕃期のものであることが想像される。もしこれが吐蕃期のものだとすれば、この種のチベット文字書寫漢文テキストの中でも最も古いものの一つということが出來る。

三、吐蕃期に於ける式叉摩那受戒の實際

この斷片は式叉摩那（śikṣamānā）が具足戒を受ける際の作法及び實際に唱出すべき問答を、『四分律』に從って具體的に書き記したもので、恐らくは實際の受戒儀式の利用に供したものであろう。

式叉摩那というのは、『玄應音義』に「正學：梵言式叉摩那、謂二歲學戒者也」といい、『釋氏要覽』に「式叉摩那：此云學法女似今尼之長髮也。『四分律』云、十八歲童女應二歲學謂二歲練身以六法練心」と說明されるとおり、十八歲に達した沙彌尼が大戒を受け比丘尼になる前、二年間の研修期間が課されているのだが、その二年間を梵語でシクシャマーニーと言い、漢語ではこれを「正學」と云い、また「學法女」[18]とも稱する。そもそも沙彌であれば、このような段階を經ずに具足戒を受けて比丘となることが出來るのだが、女性である沙彌尼の場合にはそれが許されていなかった。式叉摩那はこの二年間に、不婬・不盜・不殺・不妄語・不飲酒・不非時食の六法を學修するものとされる。その後いよいよ具足戒を受ける段階に進むが、これは羯磨を經た評決が必要となる[19]。

吐蕃期の敦煌においても、當然ながら式叉摩那の受戒が行われた筈である。ただそれがどのように行われたかを示す樣な材料はほとんどない。ところで佛教教團における受戒儀式の具體的な次第と問答の臺詞を備えたものが「羯磨」として漢譯されており、式叉摩那の受戒についても曹魏の曇諦譯『羯磨』の「比丘尼羯磨」中に「式叉摩那受大戒法」があり[20]、劉宋の求那跋摩譯『四分比丘尼羯磨法』に「式叉摩那受大戒法」があって[21]、內容はほぼ同じである。特に後者は『四分律』のテキストをそのまま利用しているけれども、本斷片とは一文字だけ合わない箇所のあることは第一節で言及した。

本斷片が一體何であるかを知るためには、斷片そのものを精査する以外にない。表面第一、二行に書かれてある語句が『四分律』にも見えず、また『四分比丘尼羯磨法』にも見出せない以上、この斷片は現在知られる文獻とは異なる何か別の

---

[18]『翻譯名義集』卷一：「式叉摩那、此云學法女。」

[19]「羯磨」（karma）はもと教團內の會議を意味したが、やがて重要議題である受戒儀式を指すようになり、更には受戒の際の所作をも意味するようになったという。

[20]『大正藏』第二十二卷、1061 頁上欄。

[21]『大正藏』第二十二卷、1066 頁下欄。

ものということになろう。ただ正面第三行以下はどうやら、『四分律』巻四十八の「比丘尼揵度第十七」から抄出したものであることは間違いない。問題は正面の第一、二行である。ここに書かれている語句は、『四分律』の同一箇所に頻出する語句もあるが、全く見えない語句もあることはすでに述べた。そこで上掲のテキストではこれらを對音から推定するしかなかった譯である。そこで筆者が對音に基づいて再構した「以尼答言已學戒」（尼がすでに戒を學び了えたと答えたので）とか、「禮須正知法羯磨」（禮として正知法の羯磨（に諮ることが）必要だ）という語句が正しいとするならば、『四分律』「比丘尼揵度第十七」の式叉摩那受大戒の次第を節略した上で、受戒人の白（口唱辭）を導くために補ったものと解さねばならない。第一節にやや長く引用しておいた『四分律』の本文では、教授師や戒師の質問が插まれるのだが、これらはこの斷片には見られない。この斷片には受戒人である式叉摩那の白のみが書かれているのであって、恐らくは或る一式叉摩那の使用に供する爲めのマニュアルだったと思われる。大戒を受くべき式叉摩那は一人ではなかったであろうから、受戒をひかえた彼等のためにこういったテキストが用意されていたと考えることも出來る。

一方では、これは比較的稀な事例とすべきであろうが、漢字の讀めない式叉摩那がいて、この人物が大戒を受ける段になって、『四分律』から必要な箇所を、誰かに賴んでチベット文字で書いてもらったか、或いは當該箇所を音讀してもらってそれを書き取ったかしたものではあるまいかと思う。しかし上に見たように「以尼答言已學戒」等の『四分律』には見えない語句のあることを考えると、その可能性は低く、やはりこの種の漢文のテキストが行われていたと見るべきであろう。それをチベット文字で書き寫したのである。

寫本斷片そのものに話を戻すと、四行ある正面が段落の始まりであるのに對して、背面は三行しかなく、ちょうど段落の終わりに當たっていることを考えると、どうもこのテキストはこの一枚だけで完結していたような氣がする。とすれば元になった漢文テキストもごく短い實用的な斷章であって、それが傳承されなかったというのも理解できる。

おわりに

以上がこの藏文音寫斷片についての小注である。ともあれ、このような式叉摩那の受戒作法のごとき文獻がチベット文字音寫により用いられていた事實は非常に興味深いものがある。一には、吐蕃期の敦煌教團において受戒の儀式が嚴格に遵守されていたこと、またいま一つは漢字識字者でなくとも大戒を受けることが

あったという事實である。九、十世紀の敦煌の識字率が總體的に低い水準にあったことは、様々な事象から推測できる。出家者の識字率は一般人に較べてずっと高かったはずなのだが、それでも漢字を識らない比丘、比丘尼があったことが分かる。以前、筆者の扱ったチベット文字書寫「長卷」という寫本[22]は、表裏あわせて 485 行ある長大な寫本で、その音韻的特徴などから十世紀の曹氏歸義軍のものと思われる。この寫本では表面に各種の教理問答、背面には佛教讃歌類が書寫されていて、恐らくは漢字を讀めない出家者が寺院における日常の宗教活動に參加するために用いたものと推測できる。今回取扱った斷片もやはり同様の事情が背景にあったものと思われる。ただこの斷片は時代が吐蕃期のものであるという違いがある。

（作者は京都大學名譽教授）

[22]IOL Tib J 1772（C131）、注 5 の拙文を參照。